

2 食と健康

(1) 大幅に上昇する健康保持用摂取品への支出

近年、高齢化の進展や医療費の自己負担の増加等もあって、健康に対する関心が高まっている。

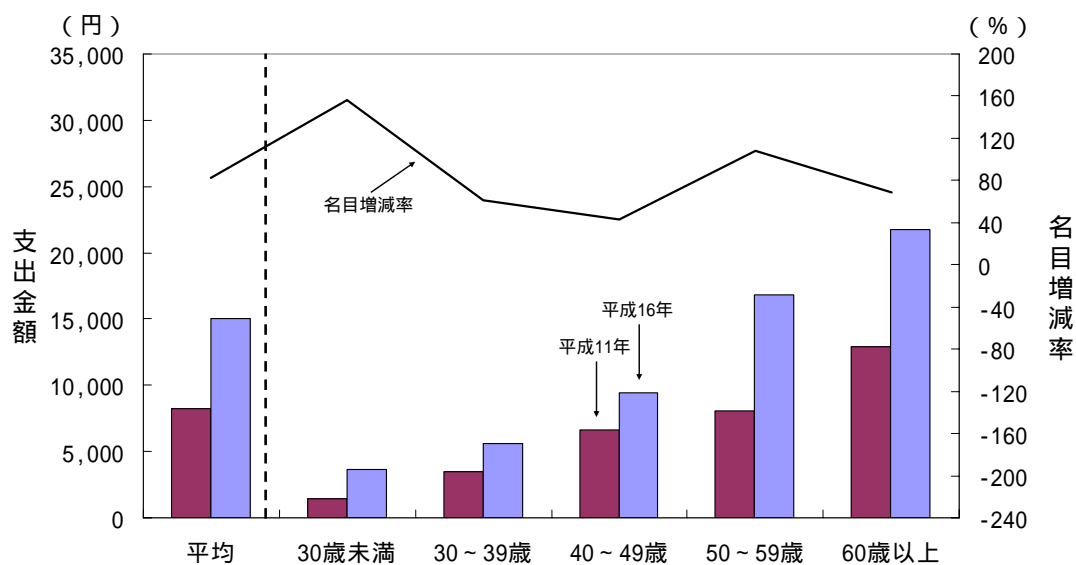
医薬品、保健医療用品・器具、保健医療サービス及び健康保持用摂取品を含む保健医療について、1世帯当たりの年間の支出金額の推移を平成7年を100とした指数でみると、7年以降緩やかな上昇を続け、15年は124.8となったが、16年は123.5と前年に比べ低下した。このうち健康保持用摂取品についてみると、平成12年まで緩やかな上昇を続けた後、13年は175.0と大幅に増加した。平成14年はダイエット食品による肝障害などの健康被害が相次いだこともあり前年に比べ低下したものの、15年は199.8と上昇し、16年は227.2と更に上昇した(図36)。

また、健康保持用摂取品の年間の支出金額を世帯主の年齢階級別に平成11年と16年を比べてみると、11年及び16年ともに年齢階級が高くなるほど支出金額が多くなっている。また、すべての年齢階級の世帯で平成16年の方が多くなっている(図37)。

図 36 保健医療の支出金額指数の推移(全国・全世帯)



図 37 世帯主の年齢階級別健康保持用摂取品の支出金額及び名目増減率(全国・全世帯)

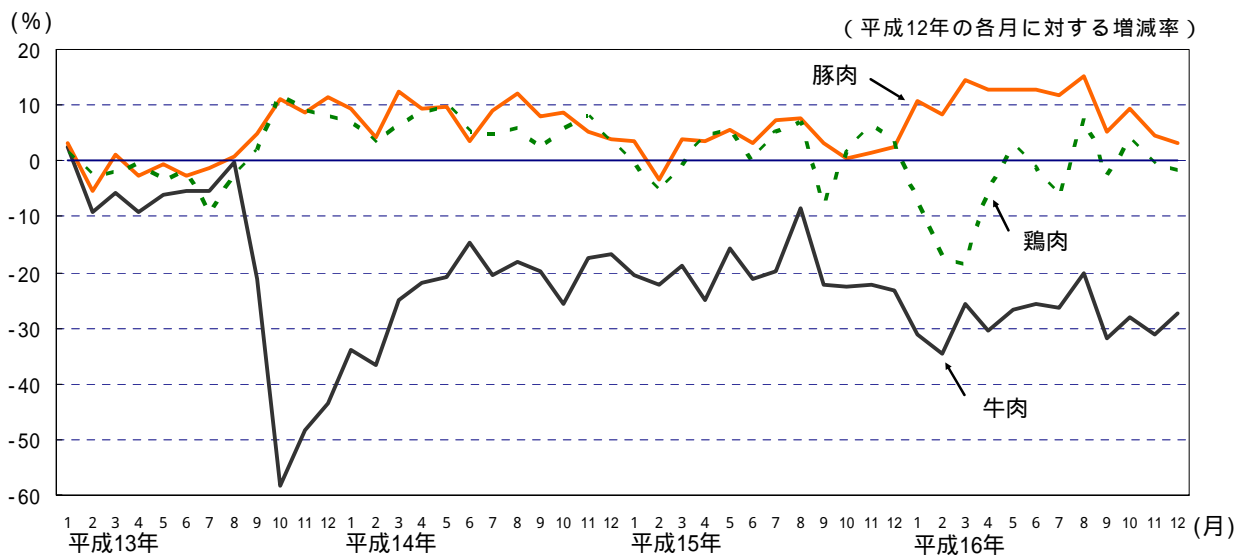


(注)健康保持用摂取品とは、栄養成分の補給など保健、健康増進のために用いる食品であって、錠剤、カプセル、顆粒状、粉末状など通常の医薬品に類似する形態をとるもの

(2) 増加した豚肉の消費

生鮮肉の購入数量を平成12年の各月と比べてみると、牛肉は国内初のBSE(牛海綿状脳症)に感染した牛が発見された直後の13年10月は58.4%と大幅に減少した。以降回復傾向を示したものの平成12年の水準には戻らず、平成14年4月から20%程度の減少で推移していたが、15年12月の米国でのBSE発生後はさらに減少している。一方、豚肉及び鶏肉は、平成13年10月以降牛肉からの代替需要もみられ、平成12年に比べ増加傾向で推移していた。ところが、平成16年1月に国内で79年ぶりとなる鳥インフルエンザの発生が確認され、鶏肉の購入数量は1月は7.3%、2月は17.5%、3月は18.5%と平成12年に比べ大幅に減少した。豚肉は、平成16年1月から8月まで鶏肉からの代替需要もみられ10%程度の増加で推移した(図38)。

図 38 1人当たりの生鮮肉の購入数量の推移(全国・全世帯)

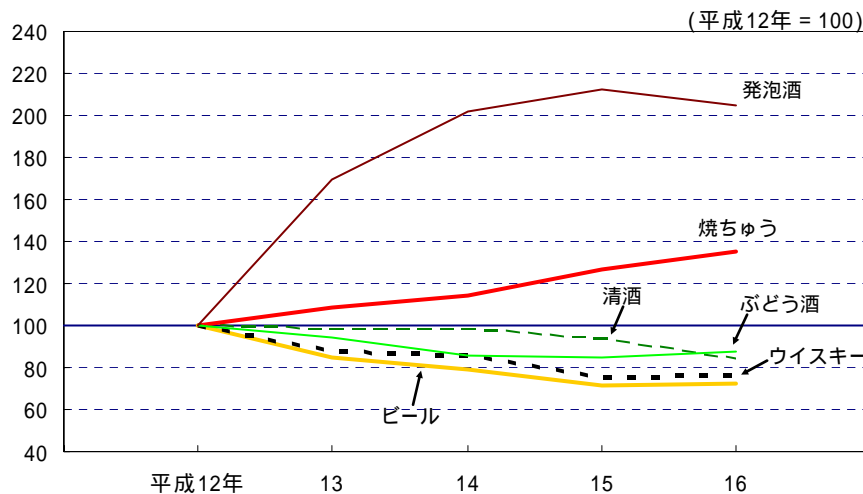


(3)伸びる焼酎、清酒を上回る

酒類について1世帯当たりの年間の購入数量の推移を平成12年を100とした指数で見ると、平成12年以降上昇していた発泡酒が16年は204.7と前年に比べ低下している。一方、低下傾向にあったビール、ウイスキー及びぶどう酒が平成16年はそれぞれ72.6、75.9、87.8と前年に比べ上昇している(図39)。

また、焼酎及び清酒の購入数量の推移を10年前の平成6年からみると、清酒は6年の12,986mlから16年の9,094mlまで減少傾向で推移した。一方、焼酎は平成6年の5,799mlから増加傾向で推移し、16年は9,309mlとなり清酒の購入数量を初めて上回っている(図40)。

図 39 酒類の購入数量指数の推移(全国・全世帯)



(注)ウイスキーは「輸入ウイスキー」及び「国産ウイスキー」を合計したものと

図 40 焼酎及び清酒の購入数量の推移(全国・全世帯)

